

俳句雑誌



空

令和2年5月31日発行

第18巻2号

通巻第90号



2020・5

SORA 90号

五十句【二】

柴田 佐知子

梅の村何でもたのむ祠あり

地を蹴つて空へ出でたる鶏合

三月や一夜浸され豆太る

大枚の動くままごとオキザリス

ゆつくりと母坐らする春の山

土筆摘む己が影へとしやがみつ

連山を抽きて定まる奴風

突端に砲台のある野に遊ぶ

蛇穴を出づミサイルは海へ落つ

南方にまだ骨のあり蝶渡る

胸張つて声あげをらむ鯉五郎

頭を低く恋猫走る漁師町

子が丸くなつて絵を描く蝶の昼

かたまりて同じ声だす子猫かな

熱弁の男に子猫抱かせたし

畑のもの煮ふくめ八十八夜かな

朧夜や膝より出づる太郎冠者

春シヨール気ままに生きて一人なり

福岡 山本則男

夜神楽のふるまひ酒は茶碗酒
 神楽果て楯のゆつくり崩れゆく
 帰らざるものへ供ふる寒の水
 容赦なく波に打たるる和布刈禰宜
 使ひ切る水の広さやかいつぶり

粕屋 秋 千 晴

重箱の蒔絵合はせて初座敷
 病床の母も紅ひくお元日
 絵双六折目のテープも色褪せし
 雨の中鳥の声する七草粥
 鏡割庖丁の背に布を当て

須恵 苑 実 耶

初鶏の声に勝れるややの声
 獅子舞の囀むより先に泣く子かな
 面取れば更に強面鬼は外
 内裏雛向かひ合はせに納めけり
 手を取られ舟に乗り込む桃の花

熊本 松 田 明 子

早々に灯を落としたる鶴の宿
 一陣よりたちまち千羽万羽鶴
 双眼鏡持つ手に息を鶴倶楽部
 ぼろ市や杵を添へたる白ひとつ
 ぼろ市を抜けて代官屋敷かな

大阪 井上和子

光秀の丹波篠山初霞
 釣瓶より新玉の水ほとぼしる
 ひらがなの名前ひとしほ祝箸
 恵方かな鹿の糞など踏みゆくも
 風花や手の煎餅に鹿の息

福岡 あさなが捷

トラックより牛引き出され金鳳花
 矢印に列曲がりゆく遍路かな
 壺焼を浦の訛でさし出さる
 うららかや日がな干し箆動かされ
 綿雲の溶けて海月となりにけり

福岡 秋 津 令

竹馬の高さ違へてやつて来る
 大寒や血を吸ひ上ぐる注射針
 質問の怒号に変はる二月かな
 待春や昨夜と変はらぬ母の息
 病棟の灯は消えて春満月

岡山 田中とし江

出初式玄界灘の青々と
 初御空大漁旗のはためけり
 出刃の峯叩く軍手や河豚料る
 道空けて通す芸妓や初戎
 揃ひ来て枝膨らます初雀

神奈川 窪みち子

屠蘇あげて遺影の若さ眩しめり
漢くさき南極よりの初メール
駅伝走者の脚に二日の陽燦々
枯蘆原立ち尽くす鷺一羽のみ
急に空く病室ひとつしんと冬

北九州 児玉充代

草ふかく雨のおよべる寒さかな
小正月過ぎ上棟の男声
銭湯のまだある町の初恵比須
丁寧にたたむ袴や初稽古
ひび割れて化石めきたる鏡餅

大阪 田岡千章

短日や動く歩道で追ひ抜かる
枇杷の花父より怖き伯父居りし
拍手と二礼と噫奉る
セーターに頭の出で獄門台の首
人間に牙のありけり冬の月

福岡 永淵恵子

縄一本渡す結界竜の玉
混み合うて身じろぎならぬ神楽宿
ときどきは逆さに振りて神楽笛
酒粕をゆつくり炙る寒の入り
法事果て女ばかりの炬燵かな

粕屋 吉田 葎

神の名の覚え難しや葦の角
みづうみの胴のくびれもかぎろへる
水鳥の総立ちとなる空の青
あたたかや舶先に水のまとひつき
道を問ふさくら大樹の辺と答ふ

千葉 原友子

新しき闇脱ぎて立つ松飾
七種を洗ふや色の交はらず
以心伝心林檎の芯に蜜詰まり
冬耕に無疵の空の広がれり
菜をすこし摘み冬耕の早しまひ

長崎 坂口晴子

初場所や櫓太鼓の宙をとぶ
雪吊の松の貫禄国技館
雪駄はみ出す黒足袋の若力士
冬あたたか力士の手形に手を当てる
初場所の奥に灯ともる相撲部屋

北九州 横田敬子

紅葉寺へ信者の如き顔をして
山寺の怠つてゐる松手入れ
烏賊船に氷積む音冬かもめ
記念写真のまた一人消え花八ツ手
捨てられぬ母の針箱水仙花

・第九回「空賞」受賞作品・

ハミング あさなが捷



眠る児も囁んでゆきたる獅子頭

さよならと読めるくちびるリラの花

毫も傷つかずに落ちし紅椿

一年生となりの席の子と帰る

ハミングではがしゆきたる春キャベツ

頑健に生まれて山の畑を打つ

両腕で抱かれに来る子花あんず

指先の力を抜きて蓬餅

萍の揺れて小舟を囲みたる

草矢打つ逃ぐる背中に更に打つ

あふれくる光の中に薔薇を剪る

追山笠おいやまの総身に水走りけり

鈴の音を振りまいてゆく祭り馬

神幸に泣く子押し込む夏まつり

掬はれて身をよぢりたる金魚かな

油蝉空をおほひて鳴きにけり

炎天や東京タワーの脚の反り

胡蝶蘭楽屋口まではみ出せり

噴水の力尽きたるごと止まる

宇宙に闇地球に眠らぬ海月

冬の日やもう音立てぬオルゴール

水鳥の羽根より軽く別れけり

残業の子を待つてゐるクリスマス

石段をななめに引かれ七五三

秋の日や赤ん坊たちの土俵入り

糲殻に肘まで入れて林檎取る

確かなる母の咀嚼や小鳥来る

地藏盆菓子の包みを握りしめ

船綱の一本棒となりにけり

夜の秋今は許せる父のうそ

草矢打つ逃ぐる背中に更に打つ

空集抄——柴田佐知子抄出

しばらくは可愛がられし新社員

秋 千晴

ゆつくりと障子を開くる春着の子

高倉 和子

奥山の枯木は真夜に歩き出す

大西 乃子

声といふあたたかきもの初電話

坂口 晴子

氷ぎつしり積み鯰船の解纜す

深川 淑枝

往生のほかは俗事や花終

角野 良生

海女どちの腹から笑ふ春焚火

中田 みなみ

一人来て舳先を揺らし松飾る

松田 明子

声が出て手が出て初湯の赤ん坊

永淵 恵子

一口の白湯にはじまる霜日和

戸栗 末廣

着ぶくれて躰縮んでしまひけり

石橋 幾代

石段の日向が動き猫移動

織田 高暢

煤逃げや行き先堂々と告げて

曾根 富久恵

眠りたる乳呑み児の手にお年玉

岩下 きぬ代

亡き母の手すりをたのむ初湯かな

林 徹也

目隠しをせずともずるる福笑

河原 敬子

寒の水血を入れ替ふること飲めり

山本 則男

雪もよひ軍手つらぬく薔薇の棘

む つみ 蓮

去年今年子のなき家に客のなし

星加 鷹彦

誰かれんげ供へてくれし父祖の墓

吉田 律

すぐ出せる煮物漬物寒の入り

原 友子

元旦の戸を繰り返してをりまする

田岡 千章

大病を経し者ばかり年忘れ

森田 明成

頭より猫の入りくる毛布かな

あさなが捷



春宵や肩を落して句会より

山内 碧

ダイヤモンドダストの中におて一人

押田裕見子

冬眠の獣のやうに眠りたし

石川子熊

読み甲斐のなき新聞やお元日

苑 実 耶

大晦日夫婦げんかで果てにけり

吉田悦子

水中の夕日を散らし鴨廻る本多トミ

本多トミ

消防車飛んで来さうな寒苗

岡村尚子

雛飾り家やはらかくなりにけり

本松陽子

タクシーは往診中です里神楽

田中とし江

裏山も寺のものなり笹子鳴く兒玉充代

兒玉充代

九十九里の怒濤に佇ちて年迎ふ

山田正子

初電車通路を泳ぐ子を確保

えとう樹里

極月やいきなりマイク向けらるる

井上和子

天窓に張り付いてゐる恋の猫

荷宮克代

老二人仙人のごと日向ぼこ

佐藤和弘

早々と予定の埋まる新暦

横田敬子

冬薔薇優しき人であたいのに

仲里奈央

小窓多き修道院や石路の花

青木朋子

母うつらうつら一族新年会

今井康子

箒目の正しき庭や寒稽古

窪みち子

聖堂の十字架掴む寒鴉

青木和男

確実に浄土に向かふ去年今年

倉智万数雄

元日の母新しき割烹着

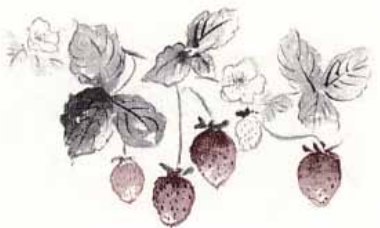
矢野綾子

忘年会話の中も年老いて

後藤園子

水槽の魚は寒さを知らぬまま

石井みゆき



空集作品評

柴田佐知子

しばらくは可愛がられし新社員 秋 千晴

企業に長年在職していたので、自分が新入社員頃の苦労も新入社員を育てる立場も一応知っている。派遣社員や中途採用者は、基本の部分が出来るが、新卒の新入社員は電話をとることも難しい。まずは学んでもらう期間が必要なのだ。半年から一年は投資期間である。そう、へしばらくは可愛がられし〜時なのだ。表現が的確である。それを過ぎると、給料分の成果を求められ甘えの許されぬ日々となる。

往生のほかは俗事や花終

角野 良生

齢のもたらす豊饒を感じさせられる作品である。若い時は生や死に向き合って考えその渦中に無常観

をもったりするが、確実に体の衰えを重ねてゆくと、若い頃には見えなかった死生観が加わってくる。十代二十代ではへ往生のほかは俗事やの措辞はなかなか手に入らないだろう。歳はとってみるがいいと思う。俳句を作るといふ意志があれば、良生さんのような自在な空間が広がってくるのだから。

声が出て手が出て初湯の赤ん坊 永淵 恵子

赤ん坊はご機嫌のようだ。その声は真似ができない可愛らしさだ。溢れんばかりの命の喜びに満ちた初湯である。

着ぶくれて躰縮んでしまひけり 石橋 幾代

着ぶくれて丸々と大きくなったのだが、首や手足は埋もれてしまう。見方を変えとへ躰縮んでしまひけり〜という措辞も真の姿に迫っている。闊達自在な幾代さんらしい作品だ。

空集

柴田佐知子選



餅買へば釣銭に粉付いてをり 粕屋 秋 千晴

鳥の影膝をよぎりし日向ぼこ

冬の蚊のなかなか外へ出たがらず

春めくや力士はみ出るカフェの椅子

しばらくは可愛がられし新社員

ぶらんこを飛び降り譲る男の子

水鳥の吹かれて丸くなりけり 福岡 高倉和子

焚火して綿毛のごとき髪となる

初鏡うしろに母の声ありて

ゆつくりと障子を開くる春着の子

勝独楽の赤き音してぶつかれり

笑ひすぎて顔の戻らぬ牡丹鍋

奥山の枯木は真夜に歩き出す 兵庫 大西乃子

風の夜や母せしやうに葛湯ねる

葱提げて日暮れの道を怒り肩

梟や術後の傷がまたひとつ

血を採らる初松籟を聞きながら

織月を放り上げたる寒四郎

放水を男の海へ出初式 長崎 坂口晴子

みな海へ向く水仙の百万本

冬椿祈りの島は風の島